

本物のバッファローに会えると思ひ込んでいた武蔵はバッファロー家いや、柳生家ですぐに己の浅はかさを知ることになる。「やあ、君がムサシかい？ うわさは聞いているよ。ハエでハシをつかむんだってね？ どうやって？ あはは、冗談さ！ 僕は当主のバッファロー石舟斎、セキって呼んでくれ」「では、セキ殿、一手ご教授を」「堅苦しさはヌキだ。じゃ、早速始めよう。まずはその言葉をとなんとかしなきゃね？ 簡単な英語から始めるよ。イチはワンっていうんだ。言ってみな？」「わ……ワンでござるか……」武蔵はいやでも梅軒との「ワンこそば対決」を回顧した。「……ワ……ン……」「なんか思い入れがありそうだな？ もっとアグレッシブでなきゃ！ もう一回、大きな声で！」「ワン！」「いいよ！ サイコーだよ！ じゃ、次は二だ。ツーって言ってみな！」「うっ……そ、それは……」アグレッシブだよ！ オープンエアハートなんだ！ でなきゃ、いつまでたってもグローバルなインターナショナルヒューマニティへのロードはクローズされちゃうぞ！ ラウドボイスで言ってみな！」「……ツー」「だめだ！ トライアゲイン！」「ツー！」「いいよ、その調子！ これからは僕をビリーって呼んでくれ！」「ツー！！！！」「ムサシィ！」「……お通！」「ビクトリー！ でも、ツーにオをつけちゃダメだ……」武蔵とお通……、ブートキャンプでついにめぐり合う二人であった。